

1. インシデントを提示して、調べる

発表者 現在、6年生のお子さんの事です。お家で下の弟とケンカをして、自分の顔を叩いたという事が連絡帳に書いてありました。学校でも自傷行動は見たことはありませんでしたし、家庭でも初めてという事の記述でした。連絡帳の続きに、この行動がどのような事になるのかしらという事が不安だという風に書いてありました。

司 会 こういったことが今、提示されました。私の方から、発表者にいくつかの質問をしてみたいと思います。こういったことが聞きたいというのがあればステップ2のところで質問できます。これは6年生の1学期という事でしたが、いつでしたか。

発表者 5月でした。

司 会 3つ下の弟さんとトラブルという事でしたけれども、トラブルの事は何か書いてありましたか。

発表者 弟さんの持っているファミコンのソフトを、本人は並べて遊びたい、弟さんは触られたくない、自分がファミコンをやりたいという事だと思います。

司 会 顔を叩く等の行動が見られたという事でしたけれども、顔をどんな風に叩いたかという事は書いてありましたか。

発表者 書いてあったか、後で聞いたか忘れましたが、平手で叩いたという事です。

司 会 家庭でという事でしたけれども、これは家庭での時間帯、下校後の夕方なのか、夜なのか、そこはどうでしょう。

発表者 確認していません。

司 会 保護者の方がこれを書かれたという事ですけれども、保護者の方は連絡帳に家庭であったことをたくさん書かれる方なんですか？それともこの日は家庭にあったことを書かれたけれども、いつもはあまり書かれない方なのでしょうか？

発表者 日によって違います。特にいつもと同じ様子だと思われる日はあまり書いていらっしゃいませんし、何かあった日はよく書いていらっしゃいます。

司 会 この保護者というのは、母親という風に理解してもよろしいでしょうか。

発表者 いつも連絡帳を書いて下さるのは母親で、今回も母親です。

2. 背景となっている事実を集める

司 会 そろそろステップ2に進みたいと思います。みなさんにはこれから質問をして頂きたいと思います。今提示されたことの背景になっている事について、みなさんに質問して集めて頂きたいと思います。先ほども言いましたが、簡潔に具体的に質問してください。それからこれだけのメンバーですので、質問を独占しないようお願いしたいと思います。質問は関連した形で、いわゆる協力した質問というもの大歓迎です。ただし、重複した質問は避けるようにしてください。発表者の推測・感想・意見を求めるのは避けて頂きたいと思います。

参加者 コミュニケーションの面で、どのようなやりとりができるのでしょうか、受容の面と表出の面がありましたけれども。

発表者 表出面では、音声言語は持っていらっしゃいません。身振りサインが使えます。身近な名詞とか、一部動詞とか、一部形容詞が使えます。本人用のコミュニケーションブックがあり、シンボルとか写真を指さして、要求の意思表示を自発的にすることができます。受容の方は、場面に依存している部分があると思いますが、簡単な音声言語指示の理解は可能です。文字は、まとまりとして、読みとれる文字はあります。

参加者 場面に依存して読みとれるということは、単独では分からない事が多いということですか。

発表者 いつもと関係のない場所でその文字のかたまりを見せられても、分からないという事です。

司 会 具体的な場面を教えてください。

発表者 例えば、朝の会に使われる名前のカードや教室の場面で使われる名前カードは、教室だと分かって

いるですが、違うところで、名前カードが提示されても誰のカードか分からない、という事です。

参加者 今の事に関連して、コミュニケーションの主に表出について教えてください。学校での表出する様子、例えば身振りサインを使うことは、家でも出来るのでしょうか。

発表者 全く同じように出来るかは、分からないですけれども、どのサインを本人が持っているかとか、どのサインを学校では学んでいるかということについては、保護者と共有しています。

参加者 本人は「ファミコンソフトを並べて遊びたい」というそうですが、自閉的なところはあるのでしょうか。

発表者 入学時の資料には自閉症という記述がありました。

参加者 どういうレベルの質問をするかがすごく難しいのですけれども、先生がこういう事を確認したかどうかという事についてお聞きしたいと思います。まず、お母さんはこのときに、本人にどのように対処したかを聞いたか、書いてあったかどうか。それから、今までの兄弟関係の中で、似たような状況があったかどうかを知っているか。それから、お母さんはこの兄弟について、どのように扱っているか。兄弟関係をどのようにしたいと思っているかを、先生が知っているかということです。

発表者 このときに、お母さんが、どのように対処したかという事については確認していません。弟はあきらめて譲ったと聞いています。似たような状況は、よくあるということは把握しています。ただ、そのときは、自傷行動を使ったという事は、その時点まではありませんでした。保護者が、兄弟関係に望んでいることについては、兄弟に、将来はこの子の面倒をみさせるつもりはないという事を聞いた事がありました。

参加者 弟さんと、そのお子さんが、コミュニケーションは直接、例えば指サインを介してできるのか、それともお母さんが訳して、弟さんに伝えているのか、コミュニケーション手段というものが、弟さんとの間にあるのか教えて頂きたいと思います。

発表者 知りません。

参加者 学校で、このように自分の要求が通らないという場面に、彼はどのような表現で伝えていたのでしょうか。

発表者 身振りサインで「ちょうだい」とか、先ほどお話したようにカードとかシンボルを持ってきて、要求するようなことは、出来ました。「やめてください」とかそういうことも、身振りで表現することが出来ました。

参加者 この場面で、初めて自傷行動が出てきたのでしょうか。その前でも学校内で、同じように自分の思いが通らないという場面がありますよね、その時は彼はどうなっていましたか。

発表者 蹴るとか、相手に対して頭突きするという行動を持っていました。

参加者 どの先生に対しても、同じ様にその行動をとるのでしょうか。

発表者 どの先生に対しても同じ様にという事ではないかもしれませんが、どの先生に対してもあります。

参加者 人に対して、あたるという感じなのでしょう。

発表者 そうです。

参加者 物ではなく？

発表者 はい。

参加者 そういう行動は多いのか、それとも珍しいことなのか。

発表者 学校では、波があります。日によってとか週によってとか、シーズンによってとか、でも無いときは一週間何も無い。

参加者 一週間無いのは、本人にとって都合が悪いことがないのか、あるいは、本人に都合が悪いことがあっても、具合によって、出たり出なかったりするのでしょうか。

発表者 同じ様な状況でも、ある時もあれば、無いときもあります。

参加者 それは具体的に何かありますか。

発表者 例えば、クラスの友だちとの関係で、弟さんと同じ様なことなんですけど、何か物を取りあったりするときでも、この前は怒っていたのに、今日は怒ってないね、とか。

参加者 この日、学校で普段と違った様子はありましたか。

発表者 特に無かったように思います。

司 会 今この子どもさん、仮に「A君」の事について、コミュニケーションについてのこと、それからお

母さん、ご兄弟、クラスの日常生活の様子についての質問をしてきました。他に何か質問しておいたほうがいいなという事がありますか。

参加者 この時は6年生の1学期ですけれども、6年生になっての、個別の指導計画での最重点の課題として取り上げるものは？

発表者 適切なコミュニケーション手段の拡充です。

参加者 この場合はサインやコミュニケーションブックを使って、というものですか。

発表者 そうですね。音声言語に置き換わる代替手段を拡充していくという事です。

参加者 上手く伝わらなかったり、困ったときに、蹴るとか頭突きをするという事をお聞きしましたがけれども、なかなか解決しないときに、どんどんエスカレートしていくのか、ある程度までで治まってしまうのか、というのはどうでしょう。

発表者 学校では長引きませんが、教室から退室するときもあります。

参加者 どのくらいの長さですか？その時はどういう風に対応するんですか。

発表者 まず、他の子の安全を確保するために他の場所にA君を移す。落ち着くまで待ちます。具体的に時間は、まちまちですけど、数分です。10分に及ばない。

参加者 家庭で、そのトラブルが起こった場合に、弟さんが、具体的にどのようにしてA君に伝えたのかというのは、連絡帳にはありましたか。

司 会 先ほどの弟さんとのコミュニケーションの手段、それについては確かめてない、ということがありました。

発表者 弟さん側からのコミュニケーションの手段は確かめてないです。

参加者 体の大きさというのは、肥満気味なのか、弟さんの大きさは？

発表者 まだ彼の方が体格は勝っています。具体的な数字は150cmの38kgぐらいでしょうか、脱ぐとぽっちゃりしていて、ちょっと脂肪は付いているように見えますが、小学校6年生と比べると、ちょっと小さいかと。でも、弟よりは体格が勝っている。

参加者 3つ年の差があって、弟さんの方が勝っているということは、弟さんは結構大きいのでしょうか。

発表者 今3年生ですから、結構という程でもないですけど、でもまだ逆転はしていないです。

参加者 彼の上にもいるのですか？

発表者 男三人兄弟の真ん中です。

参加者 学校でコミュニケーション手段で、身振りサインやシンボルを使っているという事なんですけれども、それは担任に限られた範囲で使用可能なんでしょうか、それとも担任以外でも使用可能なのでしょうか。

発表者 具体的に、彼の生活の場面の中で、担任以外の教員が関わる場面があまりないので、例えば食事の時に、とりに担任でない職員がいたときに、例えば「何が食べたい？」「何おかわりしたい？」という事については使えます。あと、身振りサインについては、本校の全員の職員が、その身振りサインを知っているわけではないので、伝わらないものもあります。

参加者 伝えようとしているんだけど、ということですか？

発表者 生活圏がそれほど広くないので、積極的に担任以外の教員に関わる時間があまりないので、ちょっと確認出来ないのですが、伝わらないものもある。あと、コミュニケーションブックについては、写真や、文字がついているシンボルなので、彼に伝える意思があれば伝わるとは思いますけれども。あまり生活圏を広げるというやりとりをしていなかったなというのを、今うかがって思ったんですけれども。学校の中で積極的に他の人に関わろうとしているかという事については、していないということです。

参加者 先ほども家庭での表出部分について話合ったんですけれども、身振り等については共有している部分もあるという事ですが、コミュニケーションブックについても家庭では共有しているのでしょうか。

発表者 していなかったです。

参加者 いつからコミュニケーションブックは使われたんですか？

発表者 ブックとしてまとめたのは、今年度6年生になってからです。

参加者 ブックとしてまとめないけれど、写真カードの使用は低学年の時からですか？

発表者 はい。

参加者 それをまとめあげたということになりますか。

発表者 この子に直接関わったのは3年生の時からなので、その時からいろいろな視覚的な支援を揃えていたんですけど、色々な形で色々な場所にあったので、それを本人用のブックにまとめたのが今年です。

参加者 シンボルそのものは、お家でも使っているんですか？コミュニケーションブックにしないけれど、提示したりするというのはやっていたという事なんですね。

発表者 はい。

参加者 この子が家庭で、例えば何かをしたいという時には、わざわざお母さんに伝えてからやるのか、まず先に行動を起こしてしまうことが多いのか、その辺はどうでしょうか。

発表者 以前は先に行動することが多かったそうです。例えば食事中に、冷蔵庫に行って、自分の好きな物を出してくるとか。でも、この時点では、お母さんに要求して、牛乳が欲しい、とか要求が出来るようにはなっていませんでした。

参加者 叩くというのは、何回くらいで、どれくらいの強さで、というのは、その連絡帳では分かっていたんですか。

発表者 回数やどのくらい続いたか、どのくらいの強度でという事については確認しませんでした。

参加者 インシデントの中では、叩く等とありましたが、他には？

発表者 壁への頭突きもあったと聞いております。

参加者 先ほどの話の中でも、他傷の時にも頭突き、蹴るなどがあると言われていましたね。

発表者 人に対する頭突きと蹴るです。

参加者 その時は、弟さんは頭突きは受けなかったんですか。

発表者 このとき他傷もあったかという事は、確認していません。

3. 問題点を探り、しぼる

司 会 それぞれみなさんの頭の中でこういった事なんだなというイメージが、それから、これにはこういった背景があるんじゃないかなとかこういったことなんじゃないかなという事についてイメージが出来たかと思います。

今度はステップ3です。聞かれた事を総合されて、全体像を考え、問題点と課題とすべきことについて意見を言ってもらい、それを聞きながら、問題点を一つに絞って頂きたいと思います。

こういったことに課題があるんじゃないかという意見を言ってください。

参加者 子どもの課題でも、母親の課題でも、先生の課題でも、よろしいですか。

司 会 課題とすべき点はたくさんあるということですね。

参加者 自傷行為を問題とするというのが、まず一つ。それから、母親が自分の関わりを報告していないという事。それから、おもちゃの取りあいを、否定的に見ているという事があると思います。

参加者 コミュニケーション手段。その子が要求をどのように伝えていくか。周りの人もどう関わるか。

参加者 伝えてもうまくいかないことを、どう取り組むかという事についてのコンセンサスというのは、どうなっているんでしょうか。子どもは伝えているんですよね「欲しい」とか。ところがうまくいかない、という事があったんだけど、そういったときに、そのことを彼にさらに伝えていくように教えるのか、あるいは「残念だったね」と教えるのか。その辺の理解がすごく大事なのではないかと思います。

参加者 私は、自分がうまくいかないときには他傷行為というのがあったわけですね。それが、自傷行為に移ったという所、その辺を何とか、先ほどのコミュニケーションの手段というのとも合わせて。それがすごく問題なのか、それとも、違う手段に置き換えて、もうちょっと本人、又は周りの人に納得いくような方法を切り替えていくようになったのか、ひどくなったとみるのか、自分の中に向かっていったという事をどう捉えるのかなというのが、自分の中で整理できないのですが。

司 会 それは先ほど自傷行為と言われた方の内容と似ているんでしょうか。

参加者 多分私はもっと違うところに、焦点をあてています。私は、これを自分の中でイメージすると、自傷行為にいくまでに、やりとりがあったと思うんです。これは問題じゃないので、言うべきかどうか迷っているんですけど、自傷行為が、譲るという行為に多分繋がったと読んでいるので、自傷行為はちょっと意味があるんだよというのを考えたいと思ったので、「自傷行為をネガティブに捉えている」ということを問題にしたんですね。

参加者 譲る、というのは？

参加者 自傷行為を見て、弟さんが譲ったんだろうとみているという事です。

参加者 自傷行為で全ての要求が通ると学んでしまったのかもしれませんがね。

参加者 だから自傷行為が問題である、という所を焦点をあてる。

参加者 身振りにしろ、話し言葉にしろ、ポーズにしろ、ある手段を獲得していくと、内容が豊かになっていきますよね。そうすると、その時にもっている交渉手段が、身振りであり、指差しであり、写真カードであり。単純なものであるから、内容がうまく伝わらない可能性があるわけですね。そこもちょっと気になるのです。

参加者 要求の高次化と、それに対応してレパトリーが高次化していないという事ですか。

参加者 子どもが「ファミコンを二つ並べて、遊びたいんだ」ということを伝える為に、どうやったら上手に伝えていけるか。レパトリーを高次化していけるか。ただファミコンをやりたいというのだったら伝わるかもしれないけれど、二つ並べて楽しみたい、あるいは弟と一緒に楽しみたいとか、そこにはどんな要求があるのか分かりませんけれども。

司 会 では、問題とすべき点はだいたい出尽くしたと思いますので、今後の課題について具体案を書いていただきたいと思います。自分なら「こういうふうにする」。ただ、問題点を一つに絞っていただきたいんです。今、沢山問題とすべき点が出てきましたけれども、これを、私は一番問題にしたいとしばってください。それに対して、「自分だったらこうする」という具体案をお書き下さい。大切なのはそうする理由、根拠です。根拠として考えるときに、事実から考えていくというのも大事ではないかなと思います。聞いた事実から理由をあげるようにしていただければと思います。

休憩（参加者は配られた用紙に問題点、対応、理由を記入し、司会に提出）

4. 対応策と理由

司 会 提出された具体案を分けると、母親の関わりを知るという事等、母親に対してのアプローチをしていこうという方、A君のコミュニケーションの手段を考えるという方、はっきり分けづらい具体案の方がありました。

今日は手順通りではグループでの協議ですが、みなさんにお書きいただいたことを一人ずつ発表して頂いて、それにもとづいて、お互い意見交換をしてみたいと思います。同じようなことを書かれている方もいらっしゃると思いますが、ちょっとずつ違うところもあると思いますので、意見を出して頂いていただきたいと思います。

そのあとに実際の経過はこうであったと、発表者が実際に対応されたことをお話しいただき、感想をそれぞれみなさんにお聞きしたいと思います。

参加者 一つに絞れなかったんですが、要するに要求表現を高度化していくという方法を、目指すことによって、相手に要求がちょっとでも伝わるようにしよう、そうする事で、混乱を起こさずに済むだろう。ただ、要求を起こしても、応じられない時があるでしょうから、その時は、平然として、応じない、という対応をする事によって、自傷行動を要求言語化しなくて済むだろうという風に考えました。

参加者 私も「自傷行動で自分の要求が通る」と弟はそのことによって譲ってくれたということを学んでしまっているの、そうじゃないという事を、徐々に分からせていくというのが重要なのではないかなと思います。そのための、特に大きな課題が、コミュニケーション手段を拡充していくという事です。そこで併せて、保護者にも働きかけて、できれば、学校で他傷が出ていますから、同じような場面のときに、どうすればいいのかという事を一緒に考えていく事を主にする。学校と一緒に取り組んでいくことを伝え、保護者の不安も解消しながら取り組んでいければと思います。

参加者 A君の今獲得している、コミュニケーションの手段を周囲も関わるというのを理解する必要があると思います。4つ考えました。一つはA君が伝えようとか、混乱しそうであるという状況は、どういう状況なのかという事を周囲がキャッチする視点を持つという事。2番目に、学校で使っているコミュニケーションブックを家族にも使えるようにする。3番目に、同時に身振りサインを家族に使う。4番目に、担任以外、A君と関わる職員が1～3番を学校でも使う事で、A君の生活範囲を広げていったらどうかということです。理由は、弟がA君とのコミュニケーション手段を把握していないようである。

例えば、学校で使用しているコミュニケーションブックを家庭でも使うことで、やりとりができる。あと自閉症であるということ。

参加者 この子に対しての具体案という形なので、まずこの自傷行為で自分の要求が通るという経験はしないほうがいだろうと考えます。本人がやりたいことを自由に遊べる時間を設定し、弟が遊べる時間ときは邪魔をしないというルールを家の中で決める必要があるのかなと考えました。あと、弟が、お兄さんがそうやって自傷して怖いから全部譲ってしまうという経験をしてしまうと、兄弟関係が心配になります。弟も自分が遊んでいるときには「待つて」という、例えば指サインだとかを使って兄に伝えて、自分も、お兄さんちゃんと言うからそれをちゃんと守ってください、という兄弟関係を築いていくというのにも必要なんじゃないかなと思いました。

参加者 学校の専門性というところから、一つに絞ったんですけれども、コミュニケーション手段の拡充と獲得ということを挙げました。理由としては、今まで挙がってきた、自傷行為で要求が通るというのとあわせて、学校で見られている攻撃的な行動で要求が通る、解決できるという図式を崩したいなと思います。違う形でのコミュニケーションが出来ることを獲得していく必要があるのではないかと考えます。理解もかなり出来ていて、表出もある程度あるお子さんなので、ダメという事への理解、違う形で自分の要求を伝えていくという表出の方の二つのかかわりを増やしたりとか、選択していく場面を設定できないかなと考えています。

参加者 具体案としては、二つの事を捉えたいと思います。一番目は、自傷行為の今後の見通し。自傷が増えていくのはどうかなと考えるので、本人の行動特徴をしっかりと捉えていくのが大切かなと思います。特に、好きな遊びとかをよく捉えていくことが必要では。キライなこと、それからして欲しくない事、というのもあると思うんですね。それをもう一度考えていったらどうかなと思っています。二番目は、コミュニケーション手段をきちんと捉えていくのが大切。みなさんのおっしゃる通りかなと思うんですけれども、学校での捉え方、家庭での捉え方あると思うんですが、そういったものを共通して捉えていく事が必要じゃないかと思っています。第一の方の理由として、自閉症の子どもというのはこだわりの強い子が多く、一つのことに集中すること、それから一つのことをやり遂げないと混乱に陥りやすいというのがあると思うので、そういったことが大切かなと思います。第二の方の理由は、子どもは身振り手振り等で要求してくると思うんですが、家庭でも学校でも上手く捉えていかないと、本人は出しているんだけど、それが繋がっていかないということになりかねない。そういったものをきちんと捉えていくのが必要だと思っています。

参加者 具体案の大きな事は、一つ、「母親のかかわりを知る」という事です。なぜ母親かといいますと、学校が連絡帳を通して母親とコミュニケーションをしているので、母親のかかわりを知るというのを目標に挙げました。具体的には、どういことを知るかというと、兄弟のトラブル時の母親の感情ということと、それからトラブルが発生してから自傷が始まるまでどのくらいなのか、その時間。それから、母親が居ない時に兄弟トラブルが発生するのか、というようなこと。それから自傷行為が発生するときとしない時があるのか、その差は何かという事。それから、母親は、どの時点でトラブルに気がつくのかという事。もし自分が家にいれば最初から気づいているのか、途中で大きな声を上げて気がつくのかということ。それから、兄弟げんかの典型的なパターンを母親はどう捉えているかという事を知りたいと思いました。理由は今まで述べた事と関係していますが、生活圏の中でのコミュニケーションの実態というのを知らなければならいだろうと思います。この事例の提示から考えますと、母親は自傷行為をネガティブにみて不安を強めているので、不安衝動から子どもに関わることを解決するために、兄弟と母の関わり方のパターンを認知する事を目的に、このような援助を私の立場としてはしたいと思います。

司 会 今の意見をお聞きになられて、互いに質疑をして頂けたらと思います。大きく分けると一つ目は「母親のこれからのかかわり」。母親と今の現状の中で次はどのような事をやったらいいかということと一緒に考えましょう、というアプローチがまず第一だという事。二つ目は「コミュニケーションの方法を身に付ける」こととか、「その中での自傷や他傷を捉えていこう」というのがあったかと思っています。

参加者 お母さんを支援者にするという時に、コミュニケーション行動のことを家庭にまで広げるというのは、教育では一般的な考え方になるのでしょうか、というのがちょっと気になったので聞きたいと思います。

参加者 例えば、コミュニケーション行動についてお母さんから提案されることもあると思うんですよね。家

ではこれを使っていますとか。その方がきっと学校では、担任の先生がよく変わることがありますよね。学年が上がると。そうすると、前の先生が使っていたのだけれど、次の先生が引き継ぎがうまくいってなくて使ってくれないと、学校側からこれを使っているのをお願いします、という文脈はあると思うんですね。

参加者 文脈として、そうですね。そういうものをどちら側から流れるかは別として、それを共有する時の前提みたいなものは、いいから使ってくださいとすぐ学校の先生が使うわけでもないし、学校がこれを行っているからと言ってすぐ家庭でも使えるわけではないというような事を、私は一番気にしている所なんです。ここをどうするかという事。学校の先生方のお話を普段を聞いていて考えた事です。

司 会 では、実際の経過をお話し願います。発表者には文章としてまとめて頂いています。起こしていただきました。発表者はずっと3年生から関わっておられますので、一番終わりごろのエピソードを取り上げ、その後の対応をお話しいただきます。

発表者 エピソード5の所になります。そこに、あるとおりですけれども、今まで大声を出して騒ぐ、他者に対する攻撃的行動はあっても、自傷行動は初めてだったという事で、このエピソードをインシデントとして提示しました。意見を言うっていただき有難うございました。今日、お話し頂いたことは、本当に参考になりました。

このエピソードのあった頃は、ちょっと前の方のエピソードに書いてあるんですけれども、学校ではいわゆるパニック不適応行動による意思表示の状況は稀になり、概ね落ち着いた学校生活を送っていました。一日のうち一回とか、週に一回という程度で、実際に攻撃的行動が全くなかったわけではないんですけれども、特に身振りサインで、「ない」（やらない、とかいらない、終わりにしてください）という否定的表現が穏やかに出来るようになってからは、それが伝わる相手には不適切な行動を使う必要がなくなってきたと把握をしていました。

簡単に経過をお話しますと、3年生の時から担任をしたんですけれども、こっちのやっている身振りサインを模倣して、4年生の時には意思表出として、自発的に使えるようになりました。シンボルを選んで、意思表示するとか、それも自発的に使えるということが4年生になって進んできました。5年生になると、本当に意思表示として使えるとか、拒否のサインが穏やかに使用できるようになるという事で、不適切な行動での意思表示が非常に減りました。先ほどから話題になったように、要求の高次化という事だと思うんですけれども。身振りサインを使っていたんですが、語彙が足りなくなって、指文字などを導入しました。そうすると、「ピザ」だと「ピ」というだけなんだけれど、頭文字で要求するようになってきました。今年、6年生になってからは、名詞以外、動詞、形容詞等の身振りも拡大してきましたし、不快を表す感情表現、「喉が痛い」「パンツが汚いから替えに行く」という、そういう「汚い」とか「痛い」という不快の意思表示も広がってきました。そして先ほどお話ししたように、今までいろいろなシンボルがあちこちにあったり、シートになっていたという事があったので、本人用のブックというものにとりまとめています。それで、現在、理解・表出できる名詞は100語以上、動詞、形容詞などにも広がってきています。

とりまく環境に関する事という事で、ここでは、言語療法を4年間受けてきた事を紹介しました。週一回民間の「ことばの教室」でSTさんが関わっています。本人の意思表出手段の拡充については、そのSTさんと情報交換しながら、学級ではこういう単語をこのように使っていますよ、とかSTさんの方からは専門家としてのアセスメントとか指導計画を頂いたりしています。STさんにも学校で使っている身振りサインとかシンボルについて情報提供し、導入していただいたりということによってきましたということを、前段の情報として、書かせていただきました。

経過なんですけれども、連絡帳による保護者の訴えを受けて、学年でケース会を実施しました。今までどおり、不適切な行動と私たちが受け取る行動も、彼の意思表出手段だろうということで、本人が自傷行動によって意思表示しているものを、分析し、意見交換しました。もちろん「オレにカセットをよこせ」というのが直接的なそこで示している意思表示だと思います。だからみなさんがおっしゃっていたように、それが通れば彼が自傷行動で自分の思いを実現するという構図になると思います。ただ、今までと違う展開になってきたな、と学年会で検討したんですね。というのは、今まで、6年までに「痛い」とか「汚い」とかは言えるようになってきたんですけれども、それ以外の否定的感情に関するものが不足していたと思いました。やっぱり自分の痛いとか汚いとか悔しいとか悲しいとか怒っているとか、全部それが不快として括られていたのが、痛い痛い、汚い汚い、と言ってわ

りと分化してきたところで、たとえば3つ4つくらいの子が、人の悪口言っておさまるといような、実際に行動に起こさなくても、「何々ちゃんのバカ」って言えばおさまるといような、そういうようなことを実は仮説にしたんです。そういう自分の感情に適切な言葉がくつくと、具体的な攻撃的行動や自傷行動を使わずに、諦められるというか、先ほど言ってくださった、伝えただけけど伝わらなかった時に上手にあきらめる、という上手に諦める一つとしてその時は考えました。だから、「くやしい」とか「弟が悪いんだ」とか悪口を言えれば、使わないで済むんじゃないかといのを仮説にしたんです。保護者と翌々日に面談し、お母さんこの間のことについて話しましょうと言って、シートを作りました。身近な人の写真と、嫌い、怒っている、悪い、うるさい、悲しい、それから肯定的な好き、とかも入れたんですけれども、それを一覧表にしたものを準備し、その身振りサインを保護者に伝えました。そして実際に自傷行動があった時に、その時の気持ちの表現方法を教えるようにお願いしました。それで、実際には自傷行動ではなかったんですけど、直後に弟とケンカをして、大騒ぎをした時に、お母さんがまず、こういうときは弟が悪いんだよとこういう風に指せよとか、スケジュールと違った時に、やっぱり地団駄踏んで怒った時に、こういうときは「悲しい」って言うんだよという事をまず教えてくださったんですね。そうしたら、そのシートを自発的に指差して、「怒ってる」というシートを3回ボンボンボンと指して、それでおさまりました。という様な報告も受けています。

先ほどご指摘を頂いた、学校でもこうやってますからどうぞ、という所はなかなか上手くいっていません。学校では絵本の読み聞かせの中で、感情に関するシンボルを入れてみたり、身振りサインを添えたりして教えています。個別学習でも、感情に関する語彙の学習を継続しており、1学期5月に自傷行動に関する家庭からの報告はその時だけで、それ以来ありませんでした。ただ、保護者にこのレポートで話題提供をしますということで、見ていただいたんです。お母さんからコメントが戻ってきて、「しかし、先日壁に後頭部を打ち付けることが始まった」と書いてあって、「それを見た私が、はっとしたり、やめなさいと言ったりはしないが、何となくやめてほしい気配を察するのか、わざとやっている素振りも見受けられる。」という事で、実は、ずっとなかったんですけども、この間、やったという事です。順調にいった方があれかと思しますので、ぼちぼちかなと思います。また、お母さんに、今日みなさんが教えていただいたことなどをフィードバックしながら、対応したいと思います。

5. 学んだことの検討

司 会 ありがとうございます。実際はこういう経過になっているという事でした。これをやってみて思われたことについて、ご意見や感想をお聞かせください。

発表者 発表者という立場の役割を与えて下さって本当にありがとうございました。質問を受けながら、自分が保護者と面談するときに、すごく一方的な情報提供をしたんだなという事を反省しました。本当に情報収集不足で本当にその時に何が起こったかについて、きちんと情報収集していなかったなという事がよく分かります。自分で、もうこの子のことはよく分かっている、だから、自分でも学級の仮説を親に伝えることだけが一生懸命で、本当にその時に何が起こったのかといのをみなさんに質問されてはじめて、あ、何も知らなかったという事をよく分かりました。その他の質問についても、なんて鋭い事を、それを具体的に言って下さいと言われると、きちんと見ていなかったなという事がよく分かりました。あと、先生方に口頭でご指摘いただいたことについては、自分がきちんと言語化できてなかった部分については、そうなんです、という様な所もあったし、そういう視点が漏れていたなという、特に、要求の高次化にレパトリーの高次化が追いついていない、とか先ほど、伝えて上手くいかないこともある、残念だったね。と言われたりという事とか、担任以外の人にどれだけ伝わっているんですか、というのを、クローズドな授業をしていたんだなという事をすごくよく分かりましたので、来年中学生になりますので、そういう視点も付け加えながらやっていきたいと思っています。ありがとうございます。

参加者 家族の役割と学校の教育の役割と、どこで線を引けるのかといのをいつも考えています。私がたっている論拠としては、家族は自然システムだという事です。今、教育的なロールを母親が取ると、それを家族全員も、みんな同じ事をするという事になると、家族の自然が持っているパワーというのが、どうなるのかという事を危惧しているんですね。みんな障害のコントロールに向かって動くという事で、家族が本来持っている兄弟の葛藤とか、障害に対する感情とか、そういったものが本当に良くな

るのか分からないという風に考えているんです。そういう意味で、家族を維持強化するという事を大事にするように、教育と連携したいなという事を一番強く思っています。今までの教育とか福祉の考え方が、医療モデルだったから仕方ない部分があると思うのですが、両親の状況を殆ど考慮しないで、家族にこう出来ないのが悪いというメッセージばかり強くはいるという事を感じているんです。自閉の子どもも、コミュニケーション障害が非常に大きいですね。このコミュニケーションだけにとらわれていくと、結局、長じたときに、社会の中で、家族が共有できるものがどのくらいあるのかな、とか、子ども自身がどのくらいのコミュニケーションを共有できるのかな、とかそういったことも考えます。だから社会全体にアプローチしなければならないという視点も必要になってくるかもしれませんけれどもそういったことを考えながら聞いておりました。

参加者 今話を聞いていて思ったんですけど、家庭のロールを明確にしていくことで安定する部分もあるんだと思うんですね。自閉症のお子さんの抱えている認知の問題については、彼らの認知特性からいうと、学校と家庭が一致している方が彼らは理解しやすい、というケースもある。そういったときに、どっちの立場、例えば分けた方がいいのか、あるいは家の人を共同治療者とした方がいいのか、という部分での議論ではなくて、子どものニーズ、あるいはA君のどれどれに関してはこう、というような議論の方がうまくかみ合ってくるのかなと思いながら聞いていたんですよ。保護者が共同治療者として、全くの専門家になっていくという考えは、実は医学モデルなんですね。本当はお母さんは、お母さんの役割をしながら、あるいはコミュニケーションの指導に関しては学校と共通、あるいは、言語治療プログラムが共通なものやっていく、ということによってより彼のコミュニケーションスキルは上がっていく可能性はあるんだけれども、お母さんが日々STとして、子どもに接していくことによって、家族はどうなっていくのかというのが、先ほどの意見の危惧の一つだと思うんですね。

参加者 でも、今分かりました。言語に関してはよりもう一つ上のレベルの評価とか専門性が必要なのかもしれませんよね。

参加者 関連する事なんですけれども、学校の先生が家庭に行って、保護者と一緒にその場で指導を考えるというやり方に興味があって、ずっと学生時代からやっています。この前経験した事例では、お母さんと一緒に家庭でお手伝いのスキルを自閉症の子どもに教えました。まず、お母さんがやりましたが、子どもは混乱して嫌がって机の下に潜り込んでしまったんです。その後、お母さんと話し合い、いわゆる構造化していくようにしたんです。その様子のビデオを研究会で紹介したら、「おまえ、始めから答えが分かっているのに、何でお母さんにあれをやらせたんだ」と言われました。私がやり方を伝えて、お母さんがこの通りやればいいんだ、と気づく、というのは簡単だったかもしれないけれど、お母さんの考え方や今までやってきたことをそこで学びながら考えていきたいと思いました。決して無駄でなかったと思います。親を支援者として育てるという意識が専門家の中では強いし、書類を作って渡したらその通りやってくれるという話を聞くこともあります。今、聞いていて、共同療育者とか共同治療者という言葉は重たいという事を感じました。

参加者 結局その自閉症の子どもの自傷行動にすれば、自傷行動に要求を表出するというある意味のスキルが身に付くことによって、家族が非常に危機にさらされる事があるわけですね。その危機をどう説明していくかという、結局家族がクローズドなシステムであると回避できない可能性があるんですよね。そこで教師が支援をしたりとか、セラピストが入ることによって、その問題を解決していく可能性が出てくる。ただ、家族システムでオープンであった方が、いろんな危機場面に対して、いろんな選択肢を選んでいけるという可能性が出て来る。専門家とか教師とか、あるいは隣のお婆さんとか、こうしたらという様な情報を入れるということで、決して家族のシステム自身は崩れるというのではなくて、むしろオープンなシステムとして変わっていくという考え方もあるのかなと思いました。

参加者 発表者にお伺いしたいんですけども、こうやって話されて、いろいろ意見を言われますよね。そのことについてあまり抵抗感はないんですか。

発表者 あなたの指導のここが悪いという話では今日はなかったもので、気が楽でした。

参加者 そういう不安はあるんですか？ここが悪いとか言われるんじゃないかな、とか思いながら話をされていたんでしょうか。

発表者 まず、こっちの手の内を全部見せて、あそこが悪い、ここが悪いという話ではないので。

参加者 会議のシステムですね。情報交換の時の、システムという事なのでしょうか。

発表者 そうですね。だから、攻撃、防御、攻撃、防御、という形ではないので。話題提供する側もいくら

か気が楽です。

参加者 今日やったインシデントプロセス法については、なかなか問題を一個に絞るのが、難しいなと自分の中では思っています。それぞれが複雑に反映していて、大事な視点がたくさんあるので、どれも大事だなと思いつながら、あえて一本に絞るならというところでの難しさと、逆に立場が違う方と意見交換すると、それぞれの視点で多面的にいろんな意見が見られるという良さがあるので、例えば個別の指導計画を作成する際に、重点指導課題を絞り込む時には、時間がかかりますけれども、上手く利用していけば、参考になる手法だなと思いました。

参加者 事実を聞くとか、事実を話すとか、出来そうで出来ないと感じました。トレーニングすることでできる、やっぱりいつも感情とか予測とかが入ってしまうのだなと思いました。

参加者 私も個別の指導計画を作っていくときに、保護者の思いを聞いていく、保護者参加という形をとります。けれど、どこまで親御さんの話を聞けばいいのか、言うとおりにするか、そういう考えがまだまだすごくあって、今言われたように、事実はどうでという客観的に教師側が受けとめる姿勢がないと、保護者の思いを受けとめていくという事にはならない、一緒に個別の指導計画を作っていくというスタンスにならないなという感じをもっていました。学校が閉ざされているのを感じているんですね。そういう意味では、こういう事例研究の取り組みの中で、保護者と思いを共有化していく力をトレーニングしていくことがすごく大事だと思うんですね。保護者や他の教師から何かを言われても、客観的に、大事な事はなんなのかという、事実で話をしていくというか、何か言われると自分の指導がまずかったとか中傷されたとかそういう話になってしまうので。子どもにとってどうなのかというのを焦点化していくために、こういう研修をうまく活用されるといいかなと思います。

司 会 司会も含めて、こういう場にみんなが慣れていく経験が必要なのだなと思いました。どう発言をしたらいいのか迷われたかと思うんですが、最初にしたらいけないということを言い過ぎたなと思いました。まず、事実を集める時には集めて、みんなで思い切り言って良いのはこういう場面なんだよ、というのを慣れてくると、事実を聞いたり話したりする事に抵抗感が少なくなるのではないかと思います。以前、研修でしたときは、5回目くらいになると、ここでこういうことを言うんだったよね、とかいうように話し合えていけて、慣れることの必要性を痛感しました。

今日はご協力いただきまして、どうもありがとうございました。